弥生時代から古墳時代の府中遺跡－府中遺跡の首長像とは？－

和泉市教育委員会生涯学習部文化遺産活用課
上田　裕人

1　はじめに

2　府中遺跡の発掘調査

・和泉市教育委員会の調査
和泉府中駅再開発、マンション建設、個人住宅建設に伴う発掘調査
・大阪府教育委員会の調査
和泉中央線拡幅工事、府道敷設工事に伴う発掘調査

3　遺構から考えられる弥生時代～古墳時代の府中遺跡の変遷

・弥生時代前期（第Ⅰ様式）
→A 地区（和泉府中駅再開発に伴う発掘調査）で土器片が少数出土
　遺構に伴っての土器出土はみられない（自然流路内が多い）

・弥生時代中期（第Ⅱ～Ⅲ様式）
→A 地区、B 地区で土器片が少量出土
　遺構にともなっての土器出土はみられない（自然流路内が多い）

・弥生時代中期後半（第Ⅳ様式）⇒府中遺跡の第1画期
→A 地区、B 地区
　竪穴建物、掘立柱建物、方形周溝墓などが検出される
　特に A 地区の南東側では、方形周溝墓が複数基築かれる
　　＝上記の2地点で遺構・遺物が多く検出

・弥生時代後期（第Ⅴ様式～庄内式併行）⇒府中遺跡の第2画期
→後期前葉、中葉に突如として遺構・遺物の検出が減る
　平地にある集落が軒並み小規模化あるいは消滅し、丘陵上に集落が出現する
　　＝観音寺山遺跡、惣ヶ池遺跡、大野池遺跡
　府中遺跡では、人は減るが集落として消滅はしていない→だが集落の様子判然としない
→後期後葉になると、徐々に人びとが戻って来る（A 地区、B 地区）

A 地区では、円形周溝墓、竪穴建物
B 地区では、竪穴建物
} 弥生時代中期後半と同じ場所に戻ってくる

・古墳時代前期

→A 地区、B 地区

A 地区=屈曲する溝、掘立柱建物、竪穴建物など

B 地区=掘立柱建物、竪穴建物、土器を多量に含む自然流路など

集落の規模や質は、A 地区が上か？

・古墳時代中期

→A 地区、B 地区、C 地区

古墳時代前期集落とほぼ位置を変えずにいたが、C 地区は突如として出現する

A 地区=石敷き遺構、木樋を伴う導水施設、掘立柱建物

B 地区=竪穴建物（韓式土器出土）、鳥足文タタキを施す土器棺

C 地区=竪穴建物、掘立柱建物、方形区画溝の一部

4　弥生時代から古墳時代にかけての A 地区の集落変遷

A 地区－和泉府中駅再開発に伴う発掘調査でまとまった平面的な調査がおこなわれた

弥生時代から古墳時代を通して数多くの遺構・遺物を確認している

特に古墳時代前期から中期には地域の中心的な存在になっているのではないか？

地形的な特徴

・自然流路で形成された南北に長細い地形

・明黄褐色粘質土で形成された安定した地山

集落の変遷

・弥生時代中期後半

→数棟の竪穴建物を築く

目立った遺物は出土していないが、土器は第Ⅳ様式を通じて出土している

東西に流れる自然流路で集団が南北に分かれている

A 地区南側で検出されている方形周溝墓群の埋葬主体は？

・弥生時代後期

→弥生時代中期後半には人々の居住はあったが、後期には突如として規模が縮小する

縮小はするが集落は消滅しない

府中遺跡から約 2km 南東に観音寺山遺跡が出現する

=府中遺跡と観音寺山遺跡の関係は未だ不明

後期後半になると徐々に人々が戻ってくる－自然流路などから土器が出土する

A 地区南側の円形周溝墓も後期中頃～後半に築かれた可能性がある

・弥生時代後期末（庄内式併行）

→竪穴建物や掘立柱建物などの遺構は検出されていない

古墳時代前期前半の屈曲する溝（大溝）の下層にある溝から土器がまとまって出土

=朝鮮半島で作られた土器も出土している（韓式土器）

和泉地域の土器（伝統的第Ⅴ様式土器）は出土するが、他の地域でよく見られる庄内型甕がほとんど出土しない（出土しても小破片）=伝統を残すのか？　流行が入らないのか？

この時期は、B 地区も人が戻ってくる

➡大きな2つの自然流路近くには集落が営まれていることが分かる

この時も両者に優劣や主従の関係は無かったと考えられる

B 地区の南側の自然流路で、淡路島から搬入された可能性の高い淡路型器台が出土

➡淡路型器台、韓式土器、他地域の土器がこの時期から点々と出土する

以前は在地的な集落であったが、この時期から集落として変化がおこっている

・古墳時代前期前半（布留1～2式）

→谷1、大溝、掘立柱建物などが検出されている

自然流路の際に小型丸底壺などの祭祀色の強い土器を一括投棄している遺構（谷1）

=谷1の周囲には同時期と考えられる無数のピットを検出　➡布留1式

谷1を削っている自然流路の流れを、人工的に改変して屈曲した溝を築く（大溝）

=ほとんど土器は出土していないが、谷1との前後関係などから布留2式

大溝の屈曲部に溝と同じ方向の建物（3間×2間）が存在する可能性

→土器が出土していないため大溝と同時期かは不明

→府中遺跡として大きな変化の時期

それまで広範囲に集団が散らばっている様相であったが、この時期には周囲で遺構の検出が減少し、A 地区に遺構が集中している

➡この周辺に集中させる要因=「府中遺跡における首長の誕生」前夜か？

・古墳時代前期後半（布留3～4式）

→竪穴建物や掘立柱建物などの居住に関する遺構は検出されていないが、祭祀に関わると考えられる遺構が所所で検出されている

和泉府中駅周辺を貫く自然流路の北側で、建築部材をまとめて川岸に丁寧に置いている遺構、さらにその北側ではほぼ関係の臼や、泉大津市域の豊中遺跡では祭祀色の強い木製品が多量に出土している　➡　府中遺跡の首長が取り仕切っていたのではないか？

・古墳時代中期

→掘立柱建物は検出されているが、竪穴建物は検出されていない

前段階と様相は同じで、所々で祭祀に関わる遺構が検出されている

＝木樋を伴った導水施設、石敷き遺構など

掘立柱建物、竪穴建物などが築かれるのは、さらに北側の C 地区になる

C 地区では、方形区画の一部と考えられる溝や掘立柱建物、竪穴建物が検出されている

➡ 今まで集落の中心地であったと考えられる A 地区から C 地区に移動する？

5 府中遺跡の首長像とは？

・弥生時代中期後半

自然流路に囲まれた狭い範囲に小さな集団が集落を営んでいた

それぞれの集団で墓域があり、そこにリーダー的な人物が埋葬された

➡ 府中遺跡では未だ首長となる人物は居ない

・弥生時代後期～後期末

観音寺山遺跡などの高地性集落へと人びとが移り、府中遺跡には人がいないような状態になる

後期後半になり人びとが戻りだすと、近畿より西側の影響が強いと考えられる円形周溝墓や、

他地域の土器、朝鮮半島由来の土器（韓式土器）が出土するようになる

➡ それまで在地色の強い集落であったが、後期末頃には外部とのつながりを持つようになる

未だ集団が散在するような状況で、ひとつのまとまった大きな集落になっていない

・古墳時代前期

前期前半（布留1～2式）に和泉府中駅周辺に人びとが集まりまとまりをつくるのではないか

➡ 共同体内の作業として自然流路を改変して屈曲した大溝や掘立柱建物を築く

地域の中での支配構造が少しずつ構築される時期

前期後半（布留3～4式）

➡ 居住域に加えて祭祀域も明確になってくる

近畿中枢部でも使用しているような祭具（緑色凝灰岩製車輪石、豊中遺跡出土木製品）

を使用する「水辺の祭祀」がおこなわれていた

府中遺跡で首長が誕生する（影響力としてはそんなに広くない、せいぜい和泉市域？）

・古墳時代中期

01－116 地点周辺に中心地が移動する

方形区画を持つ施設、大型掘立柱建物、密集する竪穴建物

➡ 方形区画により内と外を区別するようになる

さらに、その周囲に方形区画と方向軸を合わせる建物群

集落の構成員と首長層との区別が始まる → 首長居館の出現

地域を統括する首長としての地位が確立してのではないか？

引用・参考文献

紙幅の都合上、割愛させていただきます。ご了承ください。

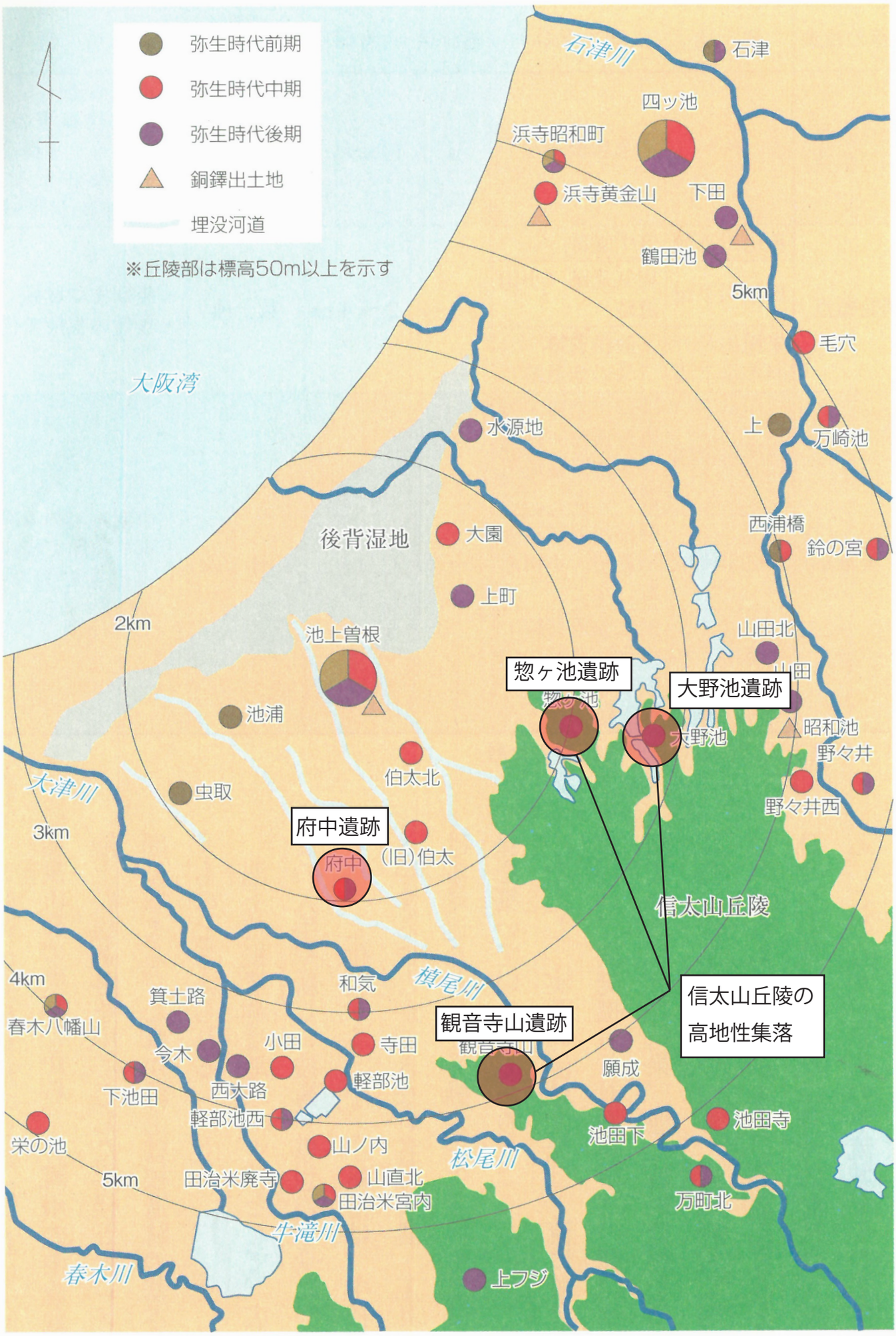

図１　府中遺跡と周辺遺跡の分布図

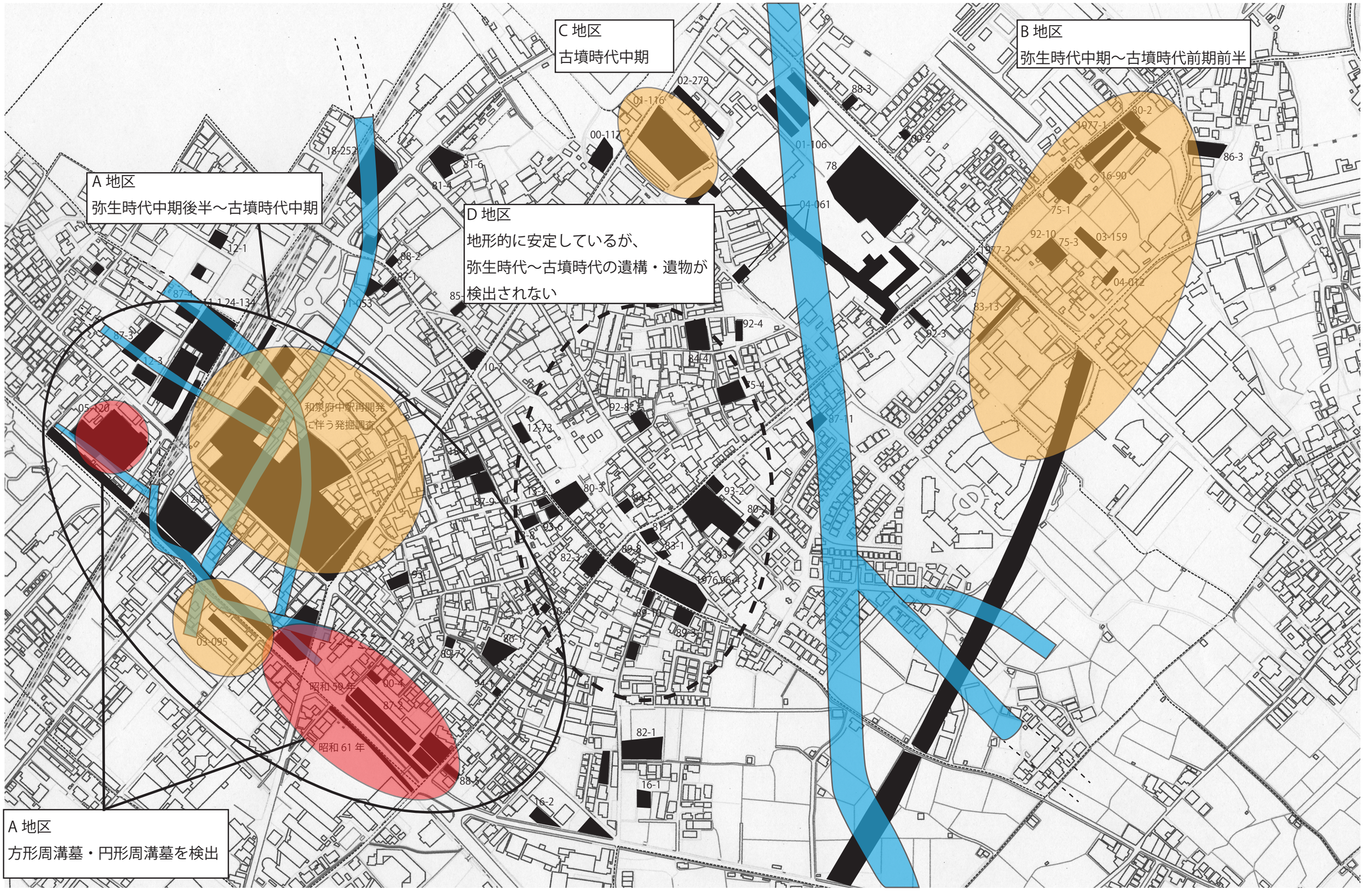

図２　府中遺跡　調査位置図（S= 任意）

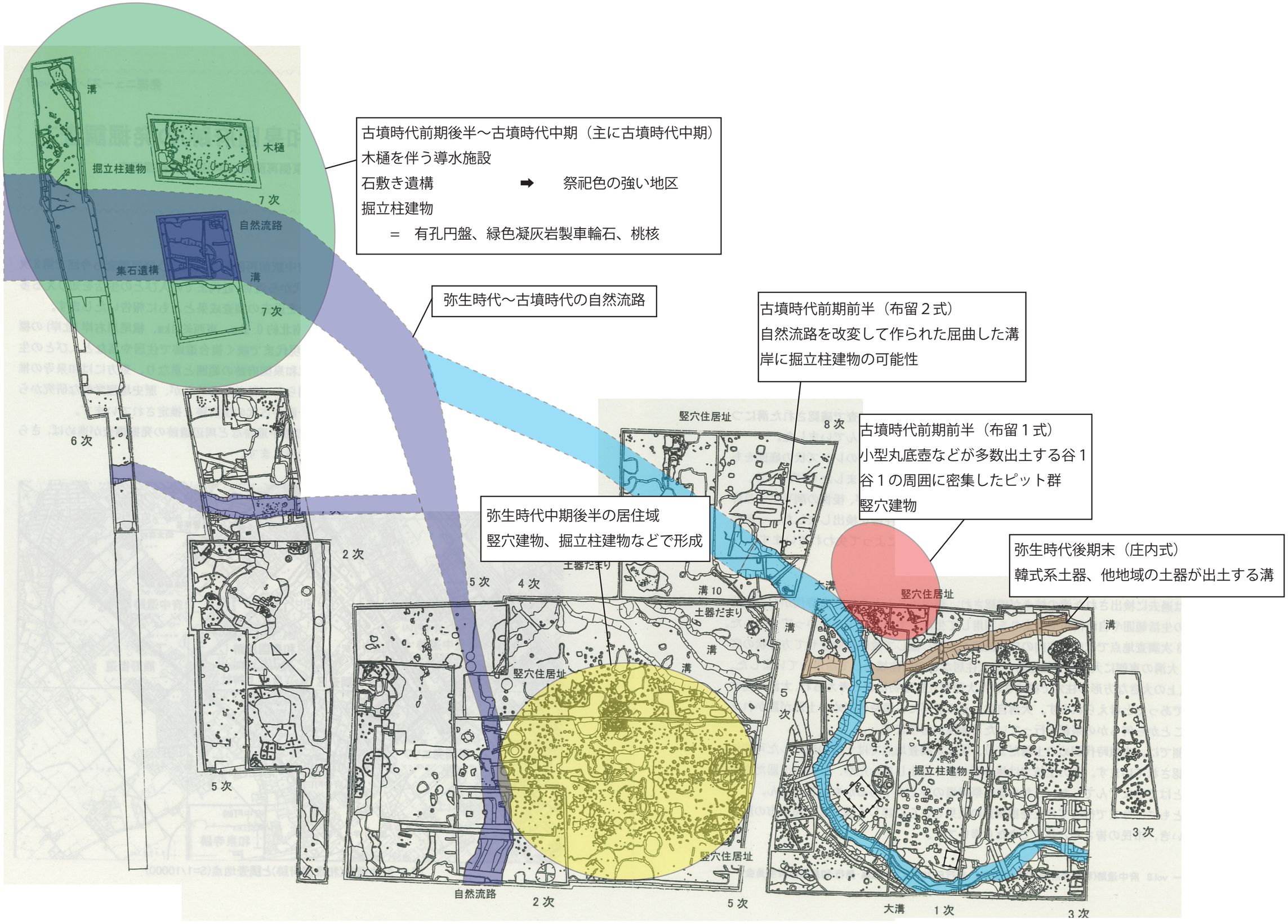

図３　和泉府中駅再開発に伴う発掘調査　平面図（S= 任意）

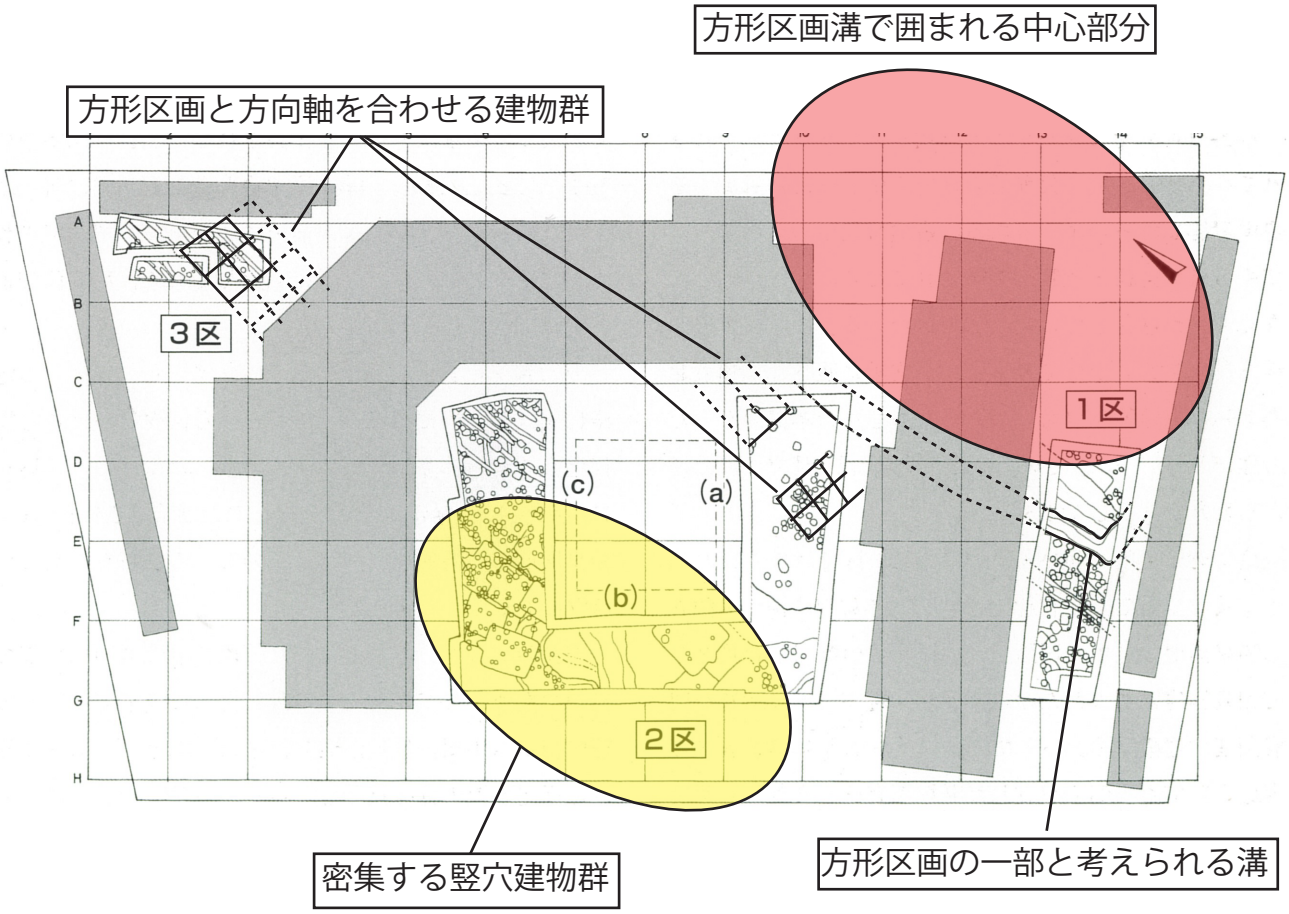

図４　府中遺跡 01-116 地点　遺構イメージ図

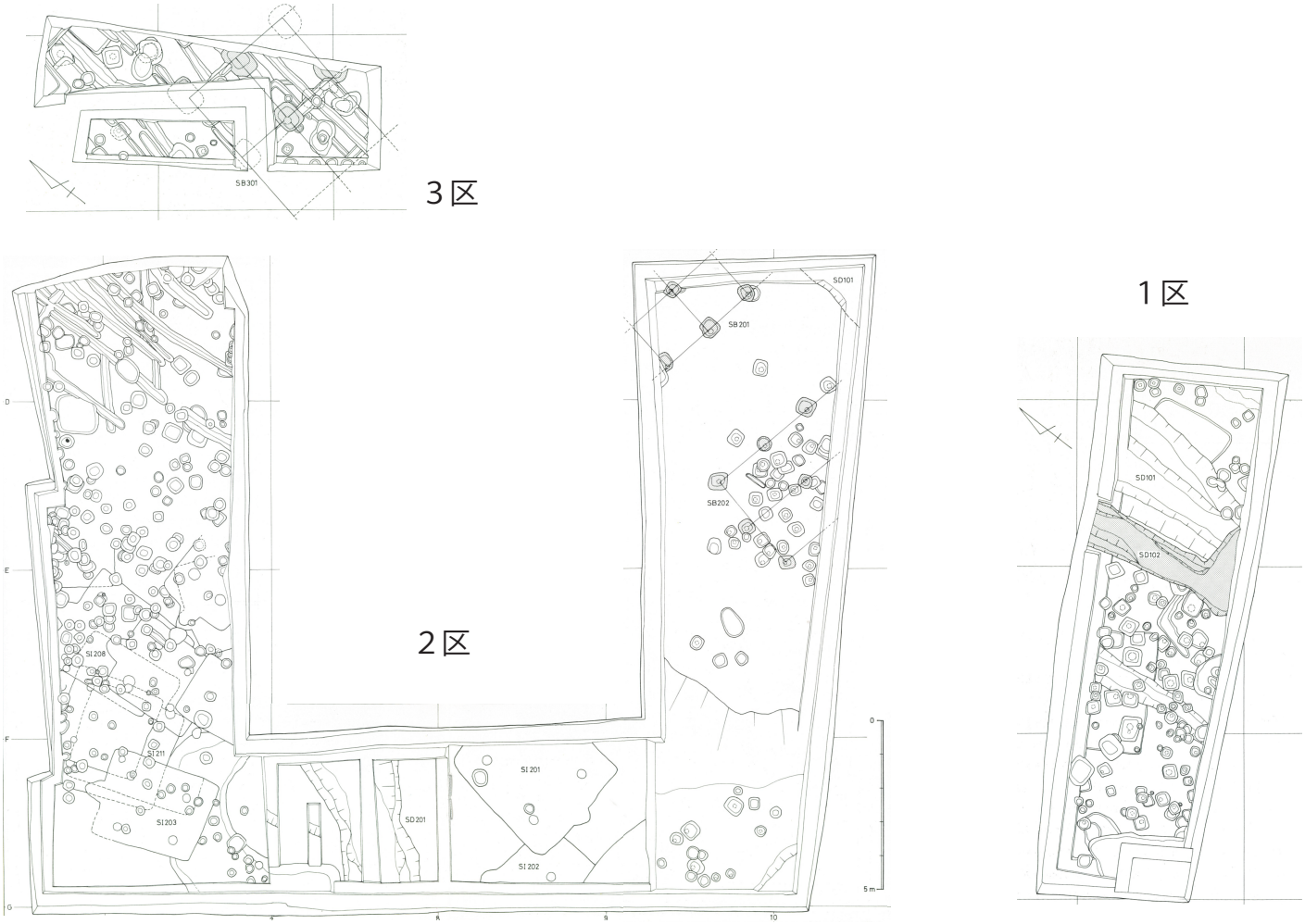

図５　古墳時代中期　府中遺跡 01-116 地点平面図

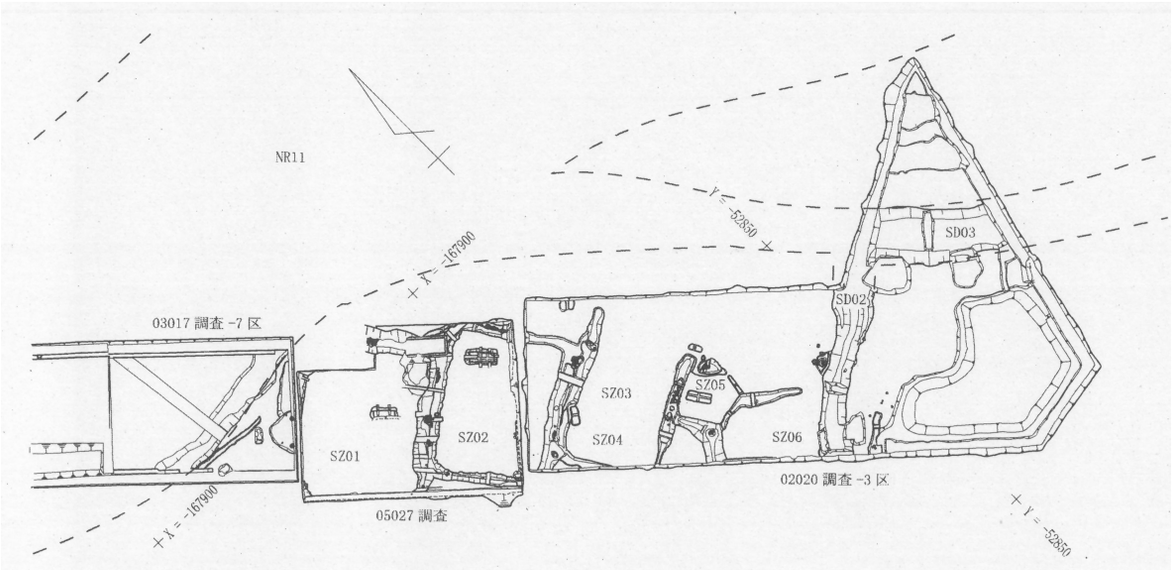

図６　府中遺跡の方形周溝墓（大阪府 2010）

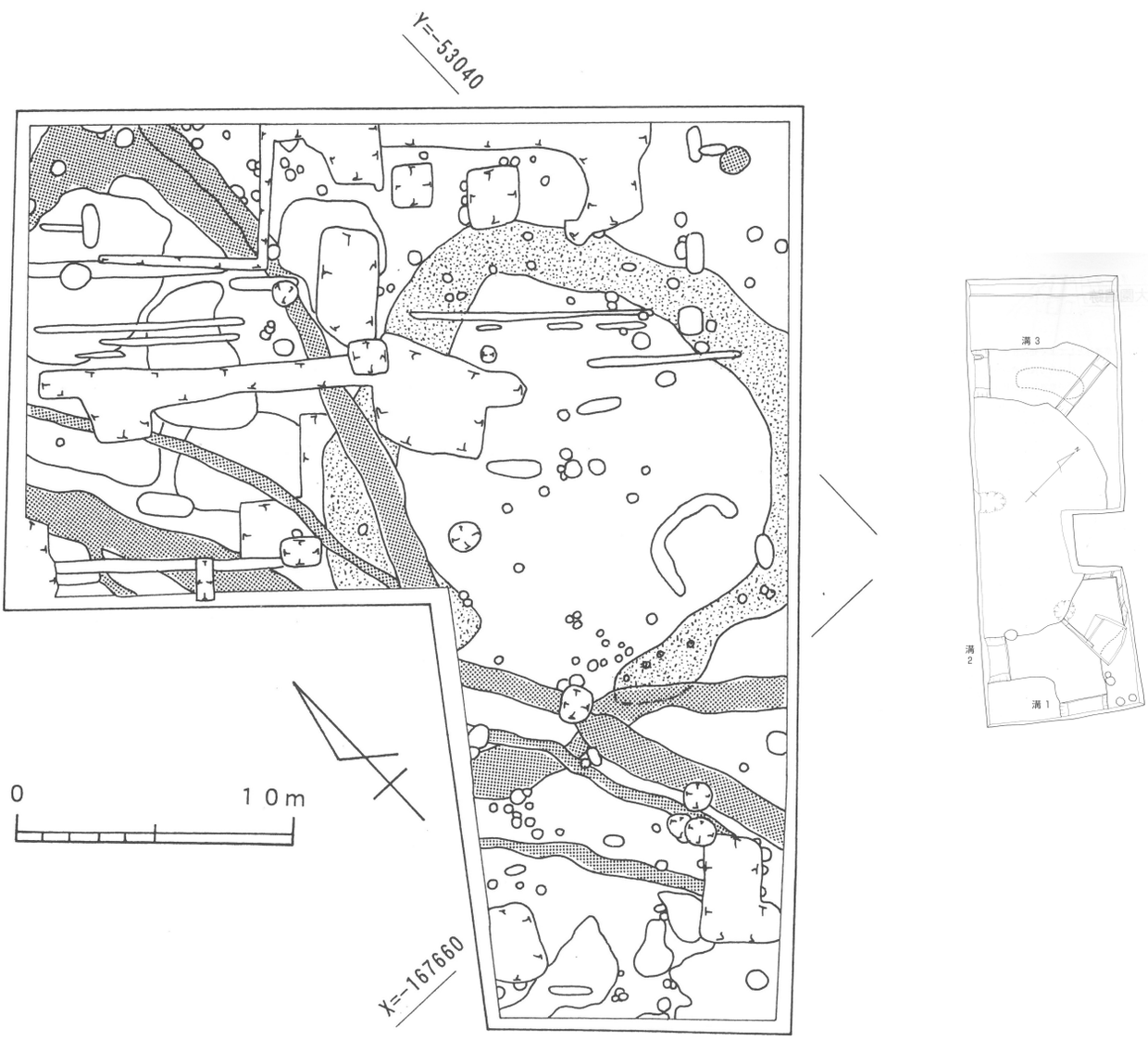

図７　府中遺跡の円形周溝墓（和泉市 2006、2002）